

桜蔭俳話会 十一月句会(第二九一回)

舞岡ふるさと村において吟行句会を実施

平成二十二年十一月二十八日

- 4点③里山の枯れゆく音に遊びけり 守 真向いに巡り来し陽や冬ぬくし 溪水
- 4点①指させばたちまち失せし冬の蝶 守 枯葉散る稔らぬ谷戸の田の上に 守
- 2点①大根引く谷の畑に老いにけり 秀一
- 2点 雲のなき空から散りし木の葉かな 秀一 不在投句 (瀬戸溪水)
- 息きらしたどる社や神の留守 友子
- せせらぎの急いて流るる冬さくら 秀一
- 畝ことの蔬菜ことなる冬日かな 秀一
- 1点 朝逢ひて夕べ触れたり冬桜 守
- 街近く広くかがやく冬田あり 眞三
- 短日や電車の遅れ心急く ヤエ子
- 綿虫を吹きつ真中を抜けにけり 友子
- 同姓の墓かたまるる冬日かな 秀一
- 葱さざむ昔のリズムや冴え返る 溪水
- お社へ続くきざはし紅葉散る 友子
- ※ 手水鉢朽葉埋もれる八幡宮 ヤエ子
- 凍空や肩寄せ合ひて六地藏 溪水
- 堆い枯葉踏み行く山の道 ヤエ子
- 冬の川三筋に流れ陽を返す 溪水
- ねぎのうね高くなりて真すぐに 眞三
- 車椅子を降りて歩めり冬日向 友子
- 短日やばたばた閉ざす雨戸かな 溪水
- 狢犬が覗み見下ろす秋階段 ヤエ子
- 冬散歩声をかけゆく夫婦かな 眞三
- 畦道をゆずり合ふ秋の舞岡 ヤエ子
- 紅葉散る死は美しく迎へたし 守
- ふる里の村をみんなで冬日陽かな 眞三
- 山道の庚申塚や花八ツ手 友子
- 山茶花の山のふもとの庭の良し 眞三